

# 伝説の家 山崎正之

昨年の夏、丹後半島に遊ぶ機会があった。ここには、古代伝承としてもっとも著名なものに属する「浦島」と「羽衣」の、その故地が今日に伝えられている。

かつて学生の頃、半島の入口にあたる天の橋立まで出かけたことがあり、今回は久方ぶりの再訪、その時以来の股のぞきを果たした。風いだ碧緑の海に、対岸までのびた一筋の松林は、記憶のなかの姿かたちよりずっと太くたくましい印象だった。景観としてはやはり他に類を見ない珍しいものだといえるだろう。

翌日、バスで伊根にむかい通称「浦島神社」こと「宇良神社」をたずねた。神社前のバス停から見通しのきいた田んぼのむこう側に、こんもりとした森が神域だった。

平坦な境内は真夏の激しい陽ざしのなかで深閑と静まりかえっていた。私は鳥居脇の木蔭で吹き出る汗をぬぐうと、社務所に来意を告げた。

神社側の格別な御配慮を得て、重要文化財である「浦島明神縁起絵巻」をじっくりと拝観できたことは、たいへん貴重な収穫だった。室町初期と伝える絵巻の保存状態はまことによろしく、経緯詳細にして繊細鮮明な図柄の見事さ、かつは豊富な色彩の展開とあいまって、浦島伝承のほぼ全貌が描きつくされているのだ。

なかでも興味がひかれたのは、浦島のおとずれた常世の国・海神の宮殿のありようは、まったく中国風そのものといってよい外観だったことだ。海彼憧憬のイメージ

が、いつか先進文化国である中国におのずと集約していったとして、それは当然すぎるほど当然であった。しかし、ここまで徹底して見せられては、何か拍子抜けの印象を否めなかったのも事実である。

また、この絵巻の結尾部分に浦島明神に奉納された行事として、相撲や競馬が動きもあざやかに描かれており、往時の華やかな雰囲気も伝えてるのが、いかにも神社の側に比重のかかった制作意図をうかがわせた。

加えていま一つ、宮司さんのお話だと実物の原寸大であるといわれる、浦島の持ち帰った「玉手箱」が、やはり室町時代といひ、黒漆研出梨子地に亀甲文の蒔絵をほどこした、なかなかの品であった。長さ四センチ、幅二十六センチ、高さ二十一センチ、その中味はおそらく当時の高貴な女性たちの、粧いの道具一式という感じだったあいだに、直径四センチほどのガラス玉がまじっていた。それがいったい何を意味したものなのか、海神の女、龍宮城の乙姫の常世びととしての魂のようにも見えたのであるが――。

もつとも日本海に突出た経ヶ岬にうち寄せる波は、まことに豪快な趣きであった。出雲の日御碕で眺めた時と同じように、日本海ならではの独特の雰囲気は満ちていた。

峰山町の宿に着いた時は午後二時をまわっていたが、宿で聞いたところ、バスでさほど離れておらぬ山辺に羽衣の乙女の舞い降りたと伝える場所があるという。雲行きを気にしながら出むいたのだが、案の定かなりの雷鳴をともなつて、大粒の雨がバスの窓を打ちはじめた。さいわいなことに、山裾のバス停は小屋風の作りになっていたので、何とかその場はしのげるものの、雨脚の強さに動きもとれず立ちつくすばかりであった。

旅というものの、その時なりの計画に従って動くのだけれど、途中で思いもかけない出来事に出会うことがある。——ほとんど家かげも見あたらない寂しい様子に、沛然たる白玉の連なりがあたかも周囲にレースのカーテンを張ったように包みこんでいた。一台の乗用車がバス停小屋の私の前にとまり、事情を聞いてくれたのはそんな状

況の時だった。地元教育委員会に勤めるというその青年の話だと、私の方に誤解があったらしく、羽衣伝承の地はここから山道をたどつてのぼりつめなければならぬという。この雨ではどうにもならない。それよりも、この少し奥に羽衣の天女の末裔だといわれている家に御案内しましょう、という青年は車のドアを開けてくれた。

豪雨のなかの唐突な訪問だったにもかかわらず、当家のある安達さんはころよく迎えて下さった。七十は越しておいでだろう、白髪で長身の御主人から、さまざまなお話を伺った。第一に、天女の子孫ということは丹後国風土記逸文の記事とは違っているのだ。老夫婦が天女を養女とし、彼女の作る酒（万病を治癒した）で財産をこしらえ、あげくの果てにその天女を追い出してしまふ話では、子孫のあり得ようはずもない。安達家の伝えでは、天女は結婚して生まれた娘の系列になるのだそうだ。爾来この家には女ばかりが続き、男子は生まれななど聞かされたが祖父も父も私もおりますよと、安達さんは笑った。

平安末年の記録文書（ただし中味は失わ

れて存在しない）があったり、時代不明のポロポロになった鞍（矢を入れる武具）があったり、何やら古くからの家柄のようではあると思われるけれど、伝説は所詮それだけの話だといわれた。老夫婦の財産はどうなったかとか、未発表の資料があるかといつて訪ねられることも多く、結構いそがしい風だった。興味深かったのは、七夕の夜に祖先を祀るのだそうだが（それも羽衣伝承の一つに結びつく）、その折りは野の花を供えることになっているという話、戦前は自宅の前庭に縁日がたち賑わった、と安達さんは遠くを眺める面持ちで語ってくれた。

むね続きの隣りから、機織りの規則たらしい音があたかも語りの伴奏のように聞こえていたのも、まことにふさわしい印象だったといえよう。いつか雨も上がって、暮色に山肌が黒々と染まるころ心からの謝意を表しつつ、私は安達家を辞した。再び先程の青年の車でバス停まで送ってもらいながら、私の思いは伝説の家の不思議な慕わしさにとらわれていた。